

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国文学研究資料館

国文研ニュース

No.20
SUMMER 2010



『津軽家文書』

目次

●メッセージ	
国文学研究資料館の共同研究	谷川恵一 1
●研究ノート	
国文学研究資料館蔵古筆手鑑2点の紹介 その2	久保木秀夫 3
『早稲田大学文学講義』特別附録「西鶴織留輪講」について(承前)	青田寿美 5
平成21(2009)年度新取	
陸奥国弘前藩庁における文書管理史料紹介	山田哲好 8
●トピックス	
第5回 インド日本文学会の報告	伊藤鉄也 10
平成22年度夏休み子ども見学デー	11
第3回日本古典文学学術賞受賞者の決定	12
人間文化研究機構連携展示「チベット ポン教の神がみ」	12
連続講演「江戸文化再考」	13
サテライト講座の参加募集	13
第34回国際日本文学研究集会	13
総研大日本文学研究専攻博士後期課程 入試説明会のご案内	14
表紙写真紹介	14

『国文研ニュース No.20』 正誤表

	誤	正
2 頁 下段右 8 行目	忍頂事務	忍頂寺務
9 頁 右 7 行目	保管工場	保管場所
裏表紙 上段 4 行目	所属する	所蔵する
裏表紙 中段右 5 行目	担当：(中略) 青山英正一戸 渉、	担当：(中略) 青山英正、一戸 渉、

国文学研究資料館の共同研究 —第2期中期目標期間に向けて—



谷川 恵一
(国文学研究資料館教授・副館長)

本年の三月に終了した法人第一期の六年間は、国文学研究資料館にとって、資料の調査研究とそれらの収集と研究者への提供を根幹とするそれまでの研究事業を主体としたあり方から、研究資源の大規模で高度な集積というそうした基幹的な役割に加え、それらを基礎にして日本文学研究の新たな進展を図るというもうひとつの役割をも担うことになった大きな転換点でした。もちろん、法人化以前においても、年間一課題を目標とした公募による共同研究や科研費など外部資金による共同研究を随時実施していたわけですが、法人化以後は、日本文学研究を館外の研究者とともに共同研究として推進していくことが恒常的な館の仕事として追加されたわけです。マイクロフィルムなどで撮影・収集した資料を広く研究者の利用に提供することがいわばモノの共同利用であったとすれば、共同研究を本格的に実施していくことは、国文学研究資料館という場そのものを多様な研究課題に取り組んでいる国内外の研究者の共同利用へと開放していくことを意味していますが、これは決して容易なことではありません。

人文系と称される研究領域がおしなべてそうであるように、日本文学研究もまた、それぞれの研究者が独自の発想に基づいて自律的に進めていく個人研究が長らく研究の主要なスタイルであり続けています。大学は、基本的に個々の研究課題をもった研究者の集合であって、ある共通のテーマに取り組んでいくための組織ではありませんし、研究所などがたまたま共同研究に日本文学をテーマとして取り上げることはあっても、それらは決して組織的でも継続的でもありませんでした。法人化とともに国文学研究資料館が恒常的に担うことになった共同研究の遂行という役割は、日本文学研究において、実は破天荒といってもいいほど斬新なものだったのです。作家研究や作品研究など個々の研究課題の細分化がいわれて久しい日本文学という研究領域において、隣接諸学の動向を視野に入れながら、共同研究として今のようなテーマを設定すべきなのか、取り上げたテーマにふさわしい研

究グループをどのようにして組織するのかなど、国内外の研究者に開かれた魅力ある共同研究の場を提供する試みは緒についたばかりであり、課題はまだ山積しています。

文学資源、文学形成、複合領域、アーカイブズという4つの研究系を1つの研究部へと統合する改組に本年度踏み切ったのは、各研究系において共同研究を企画実施するという体制を改め、館全体として、これからの日本文学を中心とする共同研究の可能性を柔軟に探っていくことを目的としています。組織のあり方に研究を合わせるのではなく、多様な課題に機動的に取り組むことができる組織を目指して、すべての教員が一つの研究部に所属するという体制を選択したわけです。こうした措置に加え、国文学研究資料館では、今後、館外の研究者の参加をえて設置している共同研究委員会の機能を強化するとともに、公募による共同研究の採択件数を増やすことを検討しながら、より開かれたかたちで共同研究を実施していきます。本年度から開始された第二期の中期目標において、国文学研究資料館は、創設以来推進してきた資料の調査研究に基づく日本文学の基礎研究と、海外との研究交流をベースにした国際共同研究の新たな展開を図ることを共同研究の目標として掲げています。この目標に向け、基幹研究、国際連携研究という二つのカテゴリーを設定することによって、重要課題に取り組む特定研究と合わせた三つのカテゴリーに共同研究を集約しました。このうち、国際連携研究とは、交流協定を結んでいる海外の諸機関などを行う共同研究を念頭に置いているのですが、たんなる機関同士が連携して行う研究ではなく、双方の機関がハブの役割を果たすことによって両国の研究者が幅広く一つの研究にかかわっていく場を作り出すことを目指しています。そのためには、研究集会の開催などを通じて、研究のプロセスをより多くの研究者に開いていく工夫を重ねていく必要がありますが、こうした工夫は、基幹研究・特定研究という他の二つのカテゴリーについても等しく必要でしょう。充実

した研究交流があつてはじめて共同研究が豊かなものになるに違いないからです。

国文学研究資料館の英語名は創立当時よりNational Institute of Japanese Literature ですが、「資料館」と“National Institute”との間にはなにかしっくりとこないものを感じてきたのは、たぶん私だけではありません。明治の辞書には「National Institute of China」に「翰林院」という語をあてているものがあります（斎藤恒太郎『和訳英文熟語叢』明治193）。むろんこれは中国の歴代王朝が設置したエリート機

関を指すので、現代の感覚からすると、National Institute of Japanese Literature はさしずめ国立日本文学研究所とでも訳すのですが、それにしても、“National Institute” というのは、「資料館」という名称になじんだ者には重く響くことばであることは間違いありません。今後、資料館は、従来たんなる英語名にすぎなかった“National Institute”をもうひとつの看板として担っていくことになります。どのような“National Institute”になるのか、模索はこれからも続きます。

第2期中期目標期間における当館の共同研究

基幹研究

文献史資料に関する基礎研究を進展させる共同研究で、以下の3研究課題を実施しています。

- 王朝文学の流布と継承
- 19世紀における出版と流通
- 近世地域アーカイブズの構造と特質

特定研究

重要課題に取り組む共同研究で、以下の4研究課題を実施しています。

- 在米絵入り本の総合研究
- 近世的表現様式と知の越境—文学・芸能・絵画による総合研究—
- 陽明文庫における歌合資料の総合的研究
- 日本文学関連電子資料の構成・利用の研究

国際連携研究

海外の研究者と連携して行う共同研究で、以下の課題を行います。

- オランダ国ライデンを中心とするシーボルト関係日本書籍資料の調査研究

公募型共同研究

国文研外の研究者から公募したテーマによる共同研究です。

- 近世民俗文化の形成—忍頂事務草稿および旧蔵書とその周辺—
- 久世家文書の総合的研究



シンポジウムの様子



研究会の様子

次号から、各共同研究の研究内容を研究ノートに掲載します。

国文学研究資料館蔵古筆手鑑 2 点の紹介 その 2 (請求番号 99 - 136)

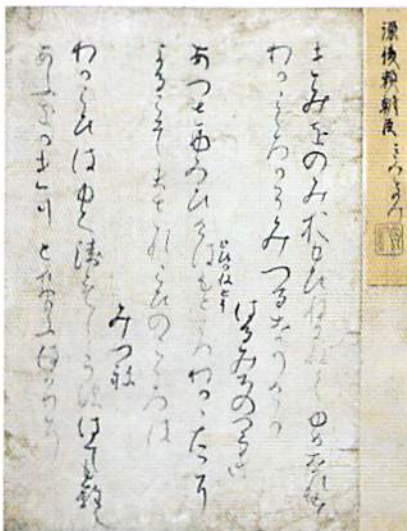
久保木 秀夫 (鶴見大学専任講師 前国文学研究資料館助教)

前号に続き、本号では国文学研究資料館が 2008 年度に購入した古筆手鑑 1 点 (99-136) を取り上げ、特に資料的価値の高い古筆切を紹介していく。

古筆手鑑 (99-136) 31.1×22.5cm 折帖 1 帖 全 18 折 オモテ 42 葉 ウラ 38 葉 貴重書 指定

A 古今集 伝源俊頼筆 民部切 唐紙 25.1×17.1cm 平安時代後期写

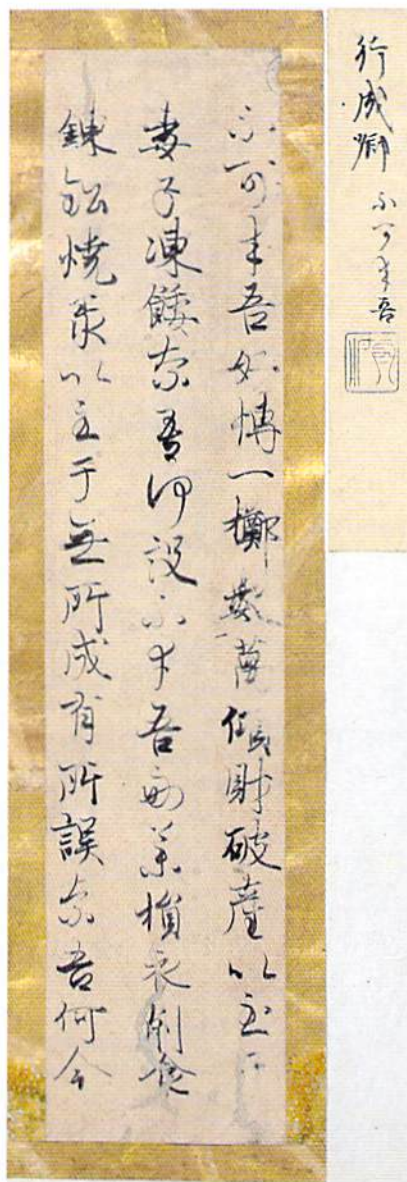
巻 12・恋 2・608・610～611。久曾神界氏『古今和歌集成立論』(1960 年、風間書房) に拠る限り、609 を欠く伝本も、4 行目異本注記のように 610 の 2 句目を「ひけとひかね」とする伝本も、他には見出せないようである。



B 未詳漢文 伝藤原行成筆 楮紙 26.7×5.9cm 平安時代後期写

博打で身を持ち崩した男性の話が記載されているようである。出典不明、ツレ未確認。ぜひともご教示をお願いしたい。

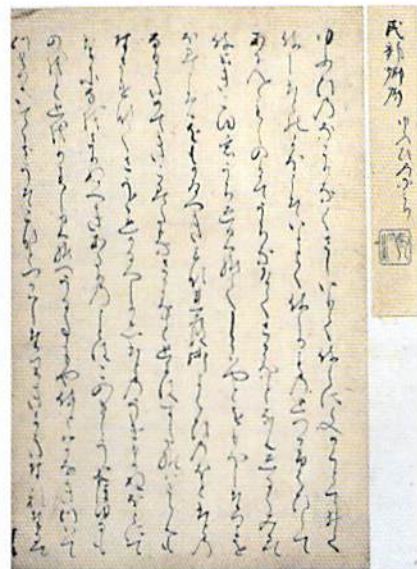
C 源氏物語 伝民部卿局筆 楮紙 24.1×15.7cm 鎌倉時代中期写



「夕顔巻。古筆学大成 23 「伝坊門局筆源氏物語切 (二)」 2 葉のツレ。

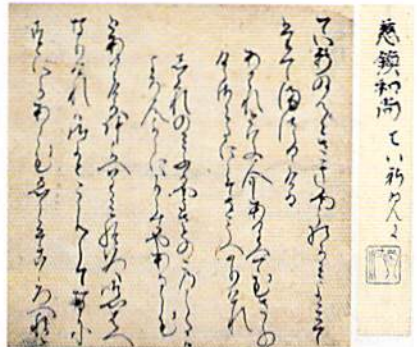
D 狭衣物語 伝阿仏尼筆 斐紙 15.9×14.1cm 鎌倉時代末期写

巻 4。金銀砂子散らしの狭衣物語六半切に、伝阿仏尼筆と伝二条為明筆との 2 種があり、ツレか否かで議論が続く。当該断簡に関して稿者はまったくの未調査。専門家による検討を俟つ。



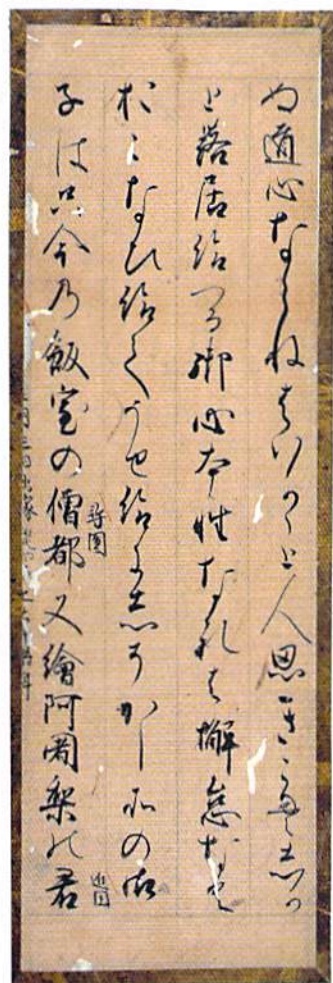
E 大和物語 伝慈鎮 (慈円) 筆 楮紙 13.7×13.7cm 鎌倉時代中期写

通行本の 32 段。古筆学大成 23 「伝慈円筆大和物語切」 1 葉のツレ。竹柏園旧蔵や『国文学古筆切入門』所収の伝慈円筆断簡とは別種。たった 2 葉の中にもかなりの異文が確認され、しかも為家本などと比較して解釈しやすい本文もある。なお要精査。



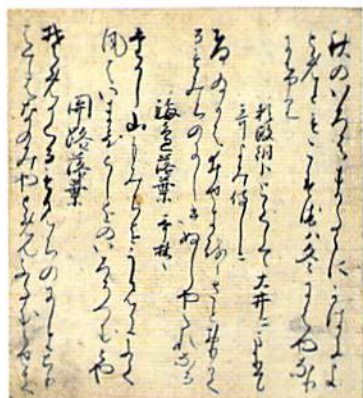
F 大鏡 伝寂蓮筆 楮紙 25.4×8.9cm 墨界野 22.6×2.6 建久 3 年 (1192) 頃写

卷3「太政大臣伊尹」。天理図書館蔵の建久3年本、及び古筆学大成24「伝寂蓮筆大鏡切」5葉のツレ。



G 林葉集 伝西行筆 楮紙 17.8 × 15.9cm 鎌倉時代初期写

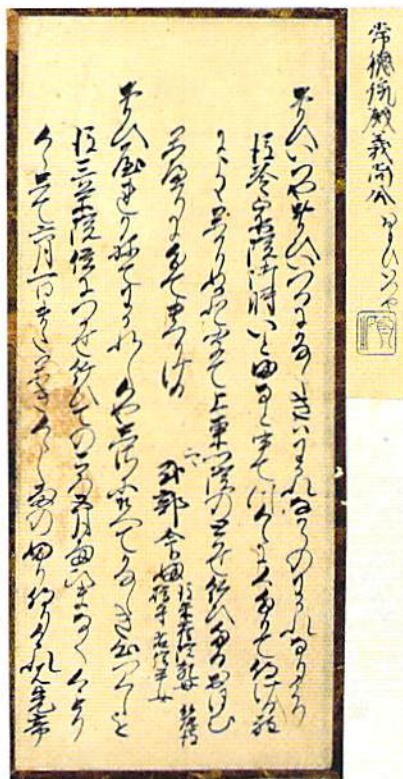
拙著『林葉和歌集 研究と校本』（2007年、笠間書院）で論じた異本の断簡16葉の、拙著未収録のツレ。これら断簡がまだ残欠本だった頃に作成された模写本が宮内庁書陵部御所本（501



-332)であり、当該断簡の書写面も含まれている。

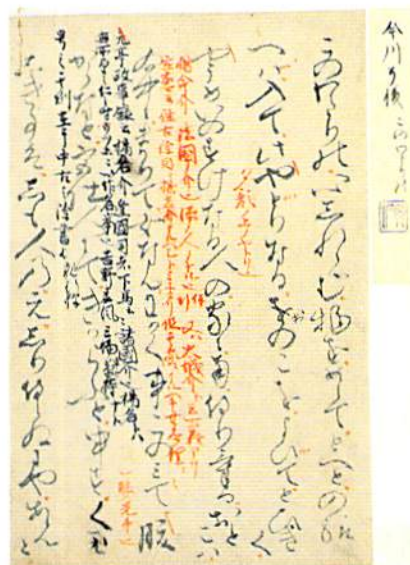
H 後拾遺集 伝足利義尚筆 楮紙 25.6 × 10.9cm 室町時代後期写

卷10・哀傷・560～562。ツレの中には歌頭に左右の合点を持つものがあり、浅田徹氏によって左の合点は「撰者通俊が集中の秀歌を更に選んだ『続新撰』の歌であることを示すと推測」されている。ただしその「筆者はこれらの合点を途中までしか写さなかったらしく、後半部分にあたる断簡では合点がない」由であり（以上、同氏「後拾遺集・金葉集の古筆断簡類」、和歌文学会2009年11月例会展示解説）、卷10の当該断簡にもやはりそれらは見られない。



I 源氏物語 伝今川了俊筆 伊予切 楮紙 27.1 × 17.9 cm 応永17年(1410)写

夕顔巻。伊予切は今川了俊が85歳で書写した源氏物語の断簡。当該断簡は新美哲彦氏「今川了俊筆『源氏物語』伊予切集成」『平安文学の新研究』所収、2007年、新典社などによって紹介済み。



ほかにも当該古筆手鑑には、伝日野輝資筆長恨歌注断簡・伝坊門局筆後拾遺集断簡（卷17・雑3・971～972）・伝堀河通具筆坊門切千載集断簡（卷9・哀傷・554～556）・伝久我通親筆龍山切千載集断簡（卷9・釈教・1251～1253）、伝寂蓮筆後撰集断簡（卷10・恋2・627～629）・伝宗祇筆定家隆両卿撰歌合（舟見一哉氏のご教示によると資料的価値が高い由。稿者は完全に見落としていた）・伝源頼政筆古今集断簡（卷13・恋3・619～622）・伝足利尊氏筆北山切新古今集断簡（卷1・春上・18～19と同8とを呼び継ぎ）等々がある。また仏書では、伝聖徳太子筆戸隠切2行・伝伝教大師（最澄）筆焼切5行・伝慈恵大師（良源）筆横川切2行・伝魚養筆御室切6行等々もある。資料的価値に加えて古美術的価値をも備えた佳品と言えよう。かつて水浸したことがあったらしく、全体に縫れが生じてしまっている点のみ残念ではあるが、それでも今後、研究のみならず各種展示にも大いに活用できそうである。なお当該古筆手鑑については、すでにマイクロ/デジタル資料・和古書所蔵目録において画像公開もされている。ぜひとも高覧賜りたい。

『早稲田大学文学講義』特別附録「西鶴織留輪講」について（承前）

青田 寿美（国文学研究資料館准教授）

国文学研究資料館公募共同研究「近世風俗文化の形成—忍頂寺務草稿および旧蔵書とその周辺—」（研究期間：平成20年度～22年度）のメンバーとして、先頃、「鳶魚と務—「西鶴織留輪講」をめぐる問題系—」と題した小論を公にした^①。そこでは、2つの「西鶴織留輪講」——複製本で奥付を有さない「西鶴織留輪講」（国文研所蔵ニ4:1177）と、複製本・未裁断資料「西鶴織留輪講」（大阪大学附属図書館・小野文庫所蔵918.5/ONO/218）をとりあげ、三田村鳶魚の主筆した西鶴輪講が活字化される経緯や刊行の背景等を確認しつつ、輪講にける鳶魚の情意を照射することを試みた。その後程なく、3つ目の「西鶴織留輪講」を早稲田大学図書館にて披見する機会を得た。そこで本稿では、前稿の補遺と併せ、「西鶴織留輪講」とその再録誌であるところの『早稲田大学文学講義』を中心に、幾つかの報告をおこないたい。

まず、「西鶴織留輪講」の公刊状況を整理しておく。初出は、『日本及日本人』第225号（昭和6年5月15日）-249号（昭和7年5月15日）。6回の休載をはさみ、計19回に亘って掲載。のち、『早稲田大学文学講義』（以下、「文学講義」と略記）の第55回第1号（昭和8年10月）-10号（昭和9年7月）に特別附録として8分載（第5号、7号不載）されたと思ひ。掲載回（号）について、前稿では、「早稲田大学講義録内容見本」により『文学講義』第55回および56回の附録と推定していたが、この度新たに、『文学講義』本誌が早稲田大学図書館に収蔵されていることを知り、第55回、58回掲載の事実が確認できた^②。各回第1号巻頭「文学講義学課表」を〔図1〕に示す。

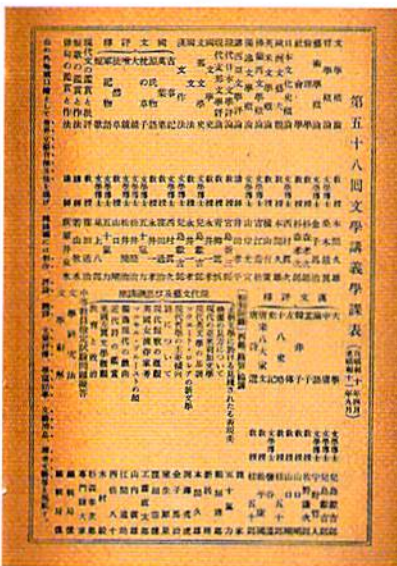
ちなみに、当該時期の『文学講義』

は、年2回春と秋に受講生募集があり、4月入学生は翌年9月修了、10月入学生は翌々年の3月修了。就学1年半で、毎月8日発行の『文学講義』が計18冊、早稲田大学出版部より郵送される。受講生は、第1号綴じ込みの学生証「早稲田大学校外生之証」によって在籍が保証される他、勉学に勤しむ上での特典を種々受けることができるという、通信教育システムの魁である。

「西鶴織留輪講」を特別附録とする『文学講義』第55回、58回の「文学講義学課表」を、第52回第1号とも併せみるに、大きな異同は認められず、数年間（或いは十数年間）に亘りほぼ同一の講義内容と講師陣にて講義録刊行が続けられていたことがわかる^③。その中で、特別附録の掲載は異例であったと考えてよい。鳶魚の“早稲田人脈”——早稲田大学ないし同出版部との繋がりをみる上でも貴重な資料であろうし、輪講の単行本化に向けた鳶魚の宿意を窺い知る縁ともなる。

先に、「再録誌」という呼び方で『文学講義』を紹介したが、単なる転載でなかったことは、鳶魚日記^④からも看取される。（下線は引用者）

- S08/04/18 夜、柴田氏第四次筆勞、…略…八十五枚持参、併、織留一卷。
- S08/07/07 織留第一、加筆。
- S08/07/11 柴田氏より筆記四十枚送致、織留二卷補修も併せて、計五十九枚。
- S08/10/10 金子憲氏、織留抜刷持参、
- S08/10/11 校正と共に織留第二原稿を早稲田へ。
- S09/01/15 金子憲氏、原稿催促。柴田氏より織留三の原稿届き、直に早稲田へ。
- S09/05/15 校正へ織留卷六原稿同封、発送。
- S09/05/19 金子憲氏、織留持参直に配分。
- S09/06/13 不在中とどきたる織留卷五、分配。



〔図1〕④ 右から、『早稲田大学文学講義』第52回、第55回、第58回の各第1号表紙
④⑤ 第55回、第58回の各学課表（早稲田大学図書館蔵）

『日本及日本人』掲載原稿に「補修」「加筆」の上、順次、早稲田大学出版部に送致。「文学講義」特別附録として分載された「西鶴織留輪講」は、「抜刷」が複数部届けられていたようで、それらを知友・先学宛て忠実に「配分」していた様子が、上掲の鳶魚日記から窺えよう。それはとりもなおさず、「西鶴織留輪講」を「西鶴武家義理物語輪講」^⑤と同様、「文学講義」掲載の後に早稲田大学出版部から単行出版することを睨んだ「補正増添」であり、そのための「助勢」を乞うものに相違ない^⑥。そして、当該「抜刷」寄贈先の1人に、近世歌謡研究家・忍頂寺務が居り、「配分」された「抜刷」の内の1点が、現在、大阪大学附属図書館・小野文庫に収められている務旧蔵の「西鶴織留輪講」と考えてよい。



〔図2〕④「西鶴織留輪講」 ⑤ノド部分拡大
(大阪大学附属図書館・小野文庫蔵)

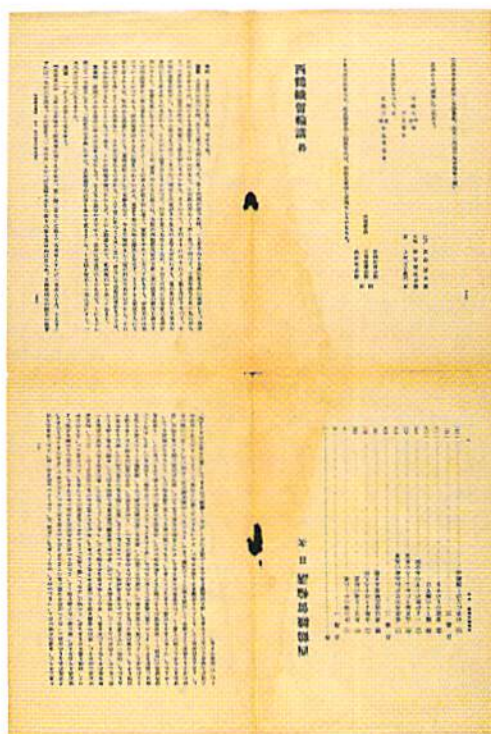
早稲田大学図書館所蔵『文学講義』第55回分には欠号があるものの、残存する各号のノドおよび「西鶴織留輪講」掲載頁数は、務旧蔵の別刷の纏まりと一致することも明らかとなった^⑦。

ところで、鳶魚日記にいう「加筆」「補修」がどの程度のものであったのかについて、『日本及日本人』連載の初出本文とつきあわせた結果、おおよそ以下の3点の傾向が提示できる。

- ①輪講全体に亘り、誤植の訂正や字句の挿入等、改訂をおこなっていること。
- ②『日本及日本人』連載本文とは切り離される形で同誌上に投稿された注釈(野間光辰・南方熊楠による)^⑧を、然るべき箇所に挿入排列していること。
- ③新たに「副書」や「附記」を補入していること^⑨。

鳶魚主宰の輪講で筆録を担当していた柴田宵曲がまず、①～③をなした「補修」稿を鳶魚のもとに届ける。その後、鳶魚が「加筆」等をおこない、『文学講義』掲載用「織留原稿」として早大出版部に郵送していたと思われる(金子憲は同出版部編集担当者か)。

今一度、3つの「西鶴織留輪講」を俯瞰しておこう。〔図2〕の別刷1葉を開いたものが〔図3〕。これを4つ折り(下→上に谷折り、左右を山折り)すると、巻末と目次1頁目が見開きになる。〔図4〕は、「西鶴織留輪講」連載最終分を載せる『文学講義』第58回第10号(昭和11年1月)だが、巻末と目次との間に、やや厚手の紙に印刷した扉が差し込まれて^⑩製本されている。この扉印刷の版面をそのままにボール紙に印刷してくるみ表紙とし、目次を巻頭に据え直して再製本したものが、国文学研究資料館所蔵の1本であろう(〔図5〕参照)。



〔図3〕「西鶴織留輪講」巻末(小野文庫蔵)



〔図4〕「西鶴織留輪講」巻末(早大図書館蔵)



〔図5〕「西鶴織留輪講」表紙(国文研蔵)

早稲田大学出版部の中枢事業である講義録は、折しも昭和6年-7年に「最悪時」を迎えたという（『早稲田大学百年史』第3巻）。出版部全体の経営不振とも相俟って、校外生獲得の途が様々講じられる中、低迷打破への起爆剤として起用されたのが、奇しくも“町学者”の鳶魚であったというのは、穿った見方か。いずれ稿を改めたい。

[注]

- (1) 『忍頂寺文庫・小野文庫の研究』4（『忍頂寺文庫・小野文庫の研究』共同研究グループ・国文学研究資料館編、平成22年3月）。
- (2) 確認し得た本誌は38冊。詳細は以下の通り。第52回第1号（昭和7年4月）-8号、18号（昭和8年9月）。第55回第1号（昭和8年10月）-6号、13号-15号（昭和9年12月）。第58回第1号（昭和10年4月）-18号（昭和11年9月）。第69回第3号（昭和16年6月）-4号（昭和16年7月）。参考までに、欠号のない第58回は、編輯兼発行者・田中正己（第1号。2号-18号は鎌原正巳）、印刷者・五十嵐良晃、発行所・早稲田大学出版部、印刷所・大日本印刷株式会社榎町工場。22.2×15.2cm（第1号）。

なお、受講生募集とPRを兼ねた小冊子『早稲田大学講義録内容見本』（以下「内容見本」と略記）の第58回文学講義入学募集分には、特別附録に関する記載はない。如何なる経緯で第55回に続く附録掲載が決定したのかは不明だが、『文学講義』第58回第1号に「特別附録 西鶴『織留』輪講掲載について…略…今回に限り六月発行の本講義より、数十頁づつ数回に分けて連載する。御期待下さい。」と広告がうたれ、第2号「編輯室より」では、

第五十七回・五十八回の本講義には、愈々来月号より、特別附録として西鶴の「織留」輪講を掲載する（前号には特にことはなかつたが、五十六回の本講義には再録しない）と述べる。この文言に従う限り、第56回文学講義の「内容見本」で謳われてい

た特別附録「西鶴織留輪講」の掲載は中止、また、第57回分の「内容見本」にて特別附録と告知されていた「西鶴「本朝二十不孝」輪講」は「西鶴織留輪講」に差し替えられたことになるか。

- (3) 講義内容の全体が一覧できる「文学講義学課表」は3回分、4年間の様子が把握できるのみ。そこで、「内容見本」で昭和14年募集分までを瞥見したが、内容縮小の傾向が見受けられるものの、主要講義にはほぼ変更がなかった。
- (4) 『三田村鳶魚全集』第26巻（昭和52年5月、中央公論社）所収。
- (5) 昭和8年2月21日付・南方熊楠宛三田村鳶魚書簡（雲藤等・原田健一編「南方熊楠・三田村玄龍往復書簡」『熊楠研究』第6号、平成16年3月）等により、『文学講義』第53回（昭和7年10月入学生分）の第4号前後から「特別附録」として分載されたものと推される。その後、1冊に纏められ、早稲田大学出版部より昭和9年1月発行。
- (6) 昭和8年4月11日付・熊楠宛鳶魚書簡（注(5)参照）による。西鶴輪講の出版をめぐる両者の遺り取りについては、注(1)の拙稿を参照されたい。
- (7) 第58回は掲載頁の区切りが異なる。
- (8) 野間光辰の注釈は、『日本及日本人』第251号（昭和7年6月15日）に「西鶴織留輪講雑記」として一括掲載。ただし、「西鶴織留輪講」巻一に係わる9項目のみ『文学講義』版に不載。割愛ではなく、失念したものと思われる。ちなみに、南方熊楠の注釈は、「読「西鶴織留輪講」」のタイトルを冠し、『南方熊楠全集』第5巻（昭和47年11月、平凡社）に収録がある故、詳細を略す。
- (9) 『日本及日本人』連載中の「西鶴織留輪講」本文にはみられない③の文章中、主要なものに限って摘記する。頁数は国文研蔵「西鶴織留輪講」により、紙幅の関係上、1発話につき原則冒頭のみ引用とした。「／」は改行を示す。

なお、150頁の【鳶魚副書】については、『日本及日本人』第239号（昭和6年12月10日）に無記名にて、「古妻もめん／勝間ではあるが、…略…ソノ意味とこれは存じ候と 石割松^(マツ)氏太郎云へり」と

頁	本文
21 23	【鳶魚副書】 損銀化銀の化銀はムダ銀、あだといふ接頭語は珍しくない。…略…
38 39	【鳶魚副書】 寇將軍の用例を一つ二つ附記して置ませう。…略…
51 52	【鳶魚副書】 算くづしの布子、寛明問記、明暦元年正月十四日蘭人献上品の内に、奥島十端とあります、…略…
64	【鳶魚副書】 此の扇子屋は「万を調べて帰れば」といふから、酒と米だけ売る店ではあるまい。…略…
73	【鳶魚副書】 江戸惣鹿子の御城之年中行事の正月の処に、…略…
78 79	【鳶魚副書】 高瀬舟の図は人倫訓蒙図彙にあり、…略…謹で一坐の方々の御教へを乞ふ。
103	【銃三追記】 弁慶の七ツ道具のこと、「義経記」その他古き物語には見えずといふ。…略…
103 104	【宵曲附記】 又弁慶借用証文の事、「塵塚物語」に義政が和漢の筆蹟を集めたることを記して、…略…
105	西鶴輪講中の京の事／兄弟姉妹の場合は…略…故に二人の手代の番頭だったら両替屋と同じ道を知つてをる訳である。（青山霞村）
115	粟田口その他／また粟田口神明のほとりは…略…西鶴は山科の事は十分知つてゐなかつたとみえる。（青山霞村）
136	【宵曲附記】 「果心居士」のこと、黒川道祐の「遠碧軒記」には「くはしん居士は大和の者にて、桑山丹後守在所のものなり。…略…
150	【鳶魚副書】 石割松太郎氏來書に曰、「古妻もめん」は勝間ではあるが、…略…その意味とこれは存じ候、云々。
257	【宵曲附記】 「人の家にありたきお内室…」このところ「徒然草」の「家にありたき木は松桜」を利かせたるか。

あり、鳶魚の寄稿であったことが判明する。これ以外にも、『日本及日本人』掲載済みの文章が『文学講義』に収録された可能性もあるが、未確認。

- (10) 『文学講義』の仕様で、全講義類同。

[附記]

早稲田大学図書館ならびに大阪大学附属図書館には、貴重な文献資料の閲覧・撮影および図版掲載の件で大変御世話になった。篤く御礼申し上げる。

平成21(2009)年度新収 陸奥国弘前藩庁における文書管理史料紹介

山田 哲好 (国文学研究資料館准教授)

■新収史料受入れの経緯

昨年11月、東京古典会の『古典籍展覧大入札会出品目録』に「陸奥国弘前藩津軽家旧蔵文書」として「江戸後期～末期 目録14冊・御用状控3冊・藩内寺院関係書8冊他 26冊」が一括撮影写真と共に出品されていた。掲載写真の冊子表題を老眼鏡をしっかりとかけ直して見ると「壱番題帳」「御役所壱番御筆筒題帳」など当時の文書記録管理台帳であることに興奮したことを昨日のように思い出している。

弘前藩の藩庁文書は、二の丸御宝蔵に収蔵されていたが、一部が江戸藩邸に移送され、津軽家の家政文書とともに、明治維新以降も同家に収蔵されていたものを、当館で昭和23(1948)年に約3,500点余の譲渡を受け、閲覧に供してきた。その出所を同じくする文書群が前記の『目録』に出品され、しかも既収蔵の文書群に同種文書が存在しない新出に属するものであった。

この新出文書については、現地保存の観点から弘前図書館郷土資料担当者に連絡し、同館では入手希望がないことを確認し、最終的に当館で購入した。出品店に入手経路を尋ねたが、同業者同志の市で入手したので詳細不明とのことであった。

■新収文書の内容

入手経緯は判然としないが、新収文書の半数を占める文書記録管理台帳の「・・題帳」は津軽家文書を所蔵する弘前市立弘前図書館に3冊が伝存している(『弘前図書館郷土資料目録 第8巻 津軽家文書目録 その2』(昭和46刊)に元治元年御書方作帳の「御書部屋題帳」「浪之間御筆筒題帳」「御伝帳題帳」が収載)。したがって弘前の津軽家文書として伝来していた可能性が高いが、あるいは当時の文書管理担当役人の家に伝来していたことも想定できるが、何らかの理由で文書群や家を離れて今回の出品となったことであろう。したがって具体的な出所は確定できないが、弘前藩政文書として津軽家文書の追加扱いとした。

その略目録を掲げて概観してみよう(文書記号は2009H、全て縦帳)。

1. 壱番題帳
2. 二番題帳
3. 五番題帳
4. 六番題帳
5. 七番題帳
6. 別櫃題帳

7. 別櫃題帳
8. 別櫃題帳
9. 別櫃題帳
10. 御役所壱番御筆筒題帳
11. 御役所式番御筆筒題帳
12. 御役所三番御筆筒題帳
13. 御蔵を印櫃入 松前御筆筒并同引出入 同別函 御軍事
14. 御蔵番櫃部分并別櫃印付 御役所御筆筒部分
15. 御用状控 作成:御家老 寛政9年正月～4月
16. 御用状控 作成:御家老 文化3年正月～3月
17. 御用状控 作成:御家老 文化4年8月～10月
18. 大円寺行人(行人守寺概要) 作成:成田七郎右衛門・岡文左衛門
19. 法華宗(法華宗五か寺明細書) 作成:成田七郎右衛門・岡文左衛門
20. 天台宗(天台宗五か寺明細書)
21. 当院御本社并御本地仏前御莊嚴之図式壱冊 作成:薬王院 文化9年10月
22. (貞昌寺)什物帳 全 作成:良仰代貞昌寺 天保2年11月
23. 誓願寺代々什物帳 嘉永2年8月
24. 百沢寺什物帳 作成:百沢寺 天保2年9月
25. 下書 最勝院什物帳 天保2年10月
26. 幸橋御門御手伝御用日記(御手伝普請) 作成:牧野左次郎・落合大右衛門 享保17年8月

No.1～14は「・・題帳」を主とする文書管理の帳簿類である(表紙写真参照)。No.15～17の3冊は家老職の御用状控、No.18～25は寺院の明細書や什物帳、No.26は江戸城外堀幸橋御門御手伝普請に関わっての御用日記である。

そこで、とりわけ注目されるNo.1～14の文書管理帳簿類について現時点での知見を紹介してみよう。

■文書管理帳簿の内容

文書管理帳簿は以下の5種類に分けることができる。

①「〇番題帳」:文書管理帳簿5冊(No.1～5、「壱番」～「七番」の内「三番」「四番」が欠)で、四ツ目黒糸綴で全冊小口書と「見出」が付けられている。帳簿内は「いろは」印(しるし)順に部分(ぶわけ)されている。

②「別櫃題帳」:別櫃で保管していた文書管理帳簿4冊(No.6～9)で、四ツ目黒糸綴で全冊小口書と「見出」が付けられ

ている。帳簿内は事項別部分で、特にNo.9の帳簿には、「弘前藩庁日記」である「国元日記」「江戸日記」が掲載されている(後述)。

③「御役所〇番御筆筒題帳」:役所で通番筆筒ごとに保管していた文書管理帳簿3冊(No.10~11、「壹番御筆筒」~「三番御筆筒」)で、四ツ目黒糸綴で全冊小口書と「見出」が付けられている。帳簿内は、「壹番御筆筒」は「壹番」~「十二番」、「貳番御筆筒」は「壹」~「十四番」、「三番御筆筒」は「壹番」~「六番」と番号部分となっている。

④「御蔵を印櫃入 松前御筆筒并同引出入 同別函 御軍事」:蔵内「を」の櫃に保管の、蝦夷地警衛に関係する松前御用筆筒とその抽斗と別函、軍事関係、以上に関する文書管理帳簿1冊(No.13)で、四ツ目黒糸綴で小口書に「御役所松前」とあり、「見出」が付けられている。帳簿内は表題と同様の部分である。

⑤「御蔵番櫃部分并別櫃印付 御役所御筆筒部分」:蔵に収蔵している通番号櫃と別櫃、さらに御役所で収蔵している筆筒について、それぞれに保管文書の「部分」(ぶわけ)項目一覧で、いわば文書部分処理上の基本帳簿といえよう。

「御蔵番櫃」部分は「壹番」~「八番」で、「壹番」は以下の内容である。

- 一御朱印并 「京都」(脇付) 公義向諸事
- 但御浦触日之丸は六番変事御届等は八番江入
- 一近衛様諸事
- 一御家被仰出并知行御書出其外古 御朱印共

「御蔵別櫃印付」は「い」~「む」で、「い」~「ほ」は以下の内容である。

- い
- 一日光并 公義年中御規式帳
- ろ
- 一増上寺并幸橋甲州川鬼怒河渡良瀬川御普請伝奏御用留
- は
- 一越後検地
- に
- 一御巡検使
- ほ
- 一公義御書付

「御役所貳番御筆筒」部分(壹番・三番筆筒は古来のままで部分しないと注記あり)は、「壹番」~「十四番」で、「壹番 一公義向」、「貳番 一御家」などと部分けされていて、

No.11「御役所貳番御筆筒題帳」の部分と一致している。

以上、新収の文書管理帳簿を作成し、管理していたのはいかなる役職であるかについては、目下解明中である。新収の帳簿は四ツ目黒糸綴じであるが、弘前図書館収蔵の3冊は、表紙に「御書方」と表記されていて、3冊共に四ツ目被せ綴じで装丁が異なる。いずれにしても、弘前藩庁における文書管理、即ち部分方法や保管容器・保管工場などについての実態を解明することができる新出史料である。

■日記類の記事内容検討

前記②「別櫃題帳」No.9に「国元日記」と「江戸日記」について編年順に保管冊数と欠本リストが掲載されている。この両日記(前者が3,299冊、後者が1,224冊)は、『弘前図書館郷土資料目録 第7巻 津軽家文書目録 その1』(昭和44刊)に「弘前藩庁日記」として目録に掲載されていて(『同目録 その2』に追加分あり)、約200年間の藩政記録として最も重要な基本史料であるが、本「別櫃題帳」の記事とかなりの差異があることが判明した。まず、「国元日記」は『同目録』では、寛文元年から慶応3年まで掲載されているが、「別櫃題帳」は天明8年までの記載しかなくその理由が判然としない(「江戸日記」は幕末まで記載ある)。冊数も「別櫃題帳」で最も多い元禄9年は50冊とあるも、『同目録』では27冊と減少しているが欠本はなく、また正徳4年は「別櫃題帳」では「但11月乾壹冊無之」で22冊であるが『同目録』では27冊である。一方「江戸日記」も『同目録』にはあるが「別櫃題帳」欠本となっていたり、その逆も多く見られる。「弘前藩庁日記」は、「国元日記」は寛文元年から、「江戸日記」は寛文8年から開始され、延宝3年に定められた「日記役勤方之定」で記録に当たっては藩政執行上先例を参考できるように、藩の「御日記方」が様々な帳簿類をまとめて清書したもので、「国元日記」の場合は、各役職でまとめられていた記録である「御伝帳」「御家老帳」「御家老剪紙控」「御用人剪紙控」「御用留書」「御広敷帳」「山方帳」「御勝手方帳」「寺社帳」「凶事帳」の記事が集大成されていることが判明している。当初は日々記録が義務づけられていたが、各組織で取扱う事項の増大と御日記方で藩庁日記以外の諸種の記録も行う状況で清書が滞ったようで、延享2年・寛政3年には記事内容の省略が認められたり、文政9年には、清書が40年程滞り物書を加勢に命じたり、天保3年には清書滞りの状況調査と清書実施のための5カ年計画が御日記方より差し出されている(『新編弘前市史』通史編2、平成14年刊)。いずれにしても、「別櫃題帳」と現存する国元と江戸の両日記の差異はいかなる理由によるものか、さらには新収の文書記録管理台帳と弘前市立図書館蔵分も併せて詳細に分析検討することで、弘前藩庁におけるその実態を解明する手掛かりになることは疑いなく、具体的究明は後日を期したい。

第5回 インド日本文学会の報告

伊藤 鉄也（国文学研究資料館教授）

平成22年2月12日・13日の2日間にわたり、〈第5回 インド日本文学会〉が開催されました。場所は、インドの国際交流基金ニューデリー日本文化センターです。

この〈インド日本文学会〉は、アニタ・カンナ先生（ネルー大学教授）、ウニタ・サッチダナンド先生（デリー大学教授）と伊藤の3人で立ち上げた学会です。

毎年ニューデリーで研究集会を開催しており、今回のテーマは「文学と絵画」でした。初日は先生方の、2日目は学生さんたちの研究発表です。



開会のセレモニーの後、日本側からは、まず今西祐一郎・国文学研究資料館館長の「平安女流文学の形成と「仮名」と題する基調講演がありました。次に、伊藤の「源氏絵の索引試案」、そして江戸英雄先生（国文学研究資料館助教）の「源氏物語画帖の場面と規範」です。共に源氏絵を取り上げての発表でした。

今回の目玉は、研究発表に加えて、会場の壁側で行った日本の古典籍の展示でした。ネルー大学の外国語学部長も、熱



心に見ておられました。

日本の古典籍は、さまざまな形で今に伝えられています。その実体を少しでも知ってもらおうということで、代

表的な「卷子本」「画帖」「冊子本」など12種類を持参しました。複製本を通してですが、実際に手にしてもらうことで、原本の感触に親んでもらおう、というのが目的です。今から千年ほど前に読まれた日本の本の実態を、この機会に体感してもらおう、ということです。今回インドに持参した作品は、以下の12点です。

- (1) 国宝「源氏物語絵巻」五島本（卷子）
- (2) 国宝「紫式部日記絵詞」五島本（卷子）
- (3) 徳川本『源氏物語画帖』（折本）
- (4) 尊経閣本「源氏物語」・柏木（冊子）
- (5) 中山本「源氏物語」・若紫（冊子）
- (6) 「浄土三部経」（卷子）
- (7) 筋切・通切「古今和歌集」（卷子）
- (8) 塗籠本『伊勢物語』（冊子）
- (9) 蓬左文庫蔵「大和物語」（冊子）
- (10) 梅沢記念館蔵「無名抄」（冊子）
- (11) 宮内庁書陵部蔵「閑吟集」（冊子）
- (12) 『田舎織糸線狭衣』（冊子）6. 別櫃題帳

みなさん、活字本でしか知らない原本の姿を、こうして自分が手にして見られることに、感動があったことと思います。この試みは、今後とも続けて行きたいと思っています。

2日目のプログラムは盛りだくさんです。

前半は、総合研究大学院大学大学院生2人とネルー大学大学院生2人、そ



してマンジュシュリ・チョーハン先生（ネルー大学教授）の研究発表です。マンジュシュリ先生の発表は、流暢な日本語による絵解き語りに関するものでした。

めずらしい楽器や大きな絵を広げての熱演でした。まさに、今回のテーマである「文学と絵画」にふさわしい、素晴らしい内容でした。この報告は、日本でもやってもらいたいと思います。

午後は、インドの大学院生の研究報告です。

デリー大学大学院生5人、ネルー大学大学院生5人です。これは、力の差が現れた発表となりました。

最後は、2日間のまとめとしてのシンポジウムです。

左から、今西館長（国文学研究資料館）、ガンگری先生（ネルー大学教授）、シバ先生（ネルー大学教授）、そして進行役の伊藤です。

シバ先生は、メリハリの利いた英語で身振り手振りの熱演でした。ガンگری先生は、うまく間を取って問いかけるスタイルの英



語でした。予感的中で、お話がなかなか終わりそうにありません。そんな時、アニタ・カンナ先生が「kindly sum up」と書いた紙を私に手渡して助け船を出してくださいました。ソッと熱弁中の先生のマイクの横に置きました。一つ英語を覚えました。お2人共にあまりにも内容が難しく、アニタ・カンナ先生に通訳をお願いして、どうにか理解できました。

今西先生は、2日間を総括する中で、ご自身の「文学と絵画」に関するお考えを語ってくださいました。

存在感のある大御所3人の先生方のお話だけに、ディスカッションがどうなるのか不安でした。しかし、英語での発表が共に時間を大幅にオーバーしたこともあり、終了後のレセプションが待ちきれないということを勝手に理由として述べ、会場の参加者との討議は国際交流基金の前庭でのレセプションの場で、ということでひとまずは逃げさせていただきました。

準備不足で、どうなることやらと気がかりなインド入りでした。しかし、みなさまの協力を得て、今年もどうにか充実した〈インド日本文学会〉となりました。

参加されたみなさま、ありがとうございました。毎度のことです。次回は早めのプログラム作りとイベントなどの準備をしたいものです。そして、一番の課題である学生さんたちのレベルアップも、早めに取り組むことで対処していきたいと思えます。

次回の〈第6回 インド日本文学会〉は、今年の11月です。この〈インド日本文学会〉への参加を希望される方は、伊藤鉄也までご連絡ください。

国際交流基金とネルー大学、デリー大学のみなさんのおかげで、たくさんの出会いの場となったことに感謝しています。次回も、実り多い集会となるように、どうぞよろしく願いいたします。

平成22年度夏休み子ども見学デー

毎年8月に開催している「夏休み子ども見学デー」を8月5日(木)に開催しました。

国文学研究資料館の「夏休み子ども見学デー」は、平成16年度から実施している催し物で、今回が7回目となります。今年は対象を小学校4年生～6年生に絞り、立川市やその周辺地域の小学校にチラシを配布するなどして参加者の募集を行いました。

当日の参加者は小学生16名の他、立川第10小学校の校長先生及び保護者の方8名が参加しました。また、立川第4中学校の先生と読書部の生徒4名が本催し物を特別に見学しました。

最初に今西祐一郎館長の挨拶があった後、閲覧室、教員研究室、展示室の館内見学が行われました。子ども達は普段見慣れない昔の本やマイクロフィルム資料を見て、驚きの声を上げていました。

その後、江戸助教による「百人一首の話」があり、引き続きカルタ取り大会が行われました。カルタ取り大会では、今年も3名の講師（青柳隆志先生、内池三郎先生、兼築信行先生）をお招きし、狩衣姿で宮中歌会始めと同じ読み方で百人一首の和歌を披講してもらいました。



第3回日本古典文学学術賞受賞者の決定

当館賛助会では、日本古典文学会賞を継承し、若手日本古典文学等研究者の奨励、援助を目的として、日本古典文学学術賞を制定しています。

日本古典文学学術賞選考委員会の厳正な審査の結果、以下の方に授賞することを決定しました。

久保木秀夫（鶴見大学文学部講師）

水谷 隆之（佛教大学文学部人文学科専任講師）

人間文化研究機構連携展示「チベット ポン教の神がみ」

平成22年7月2日(金)～9月10日(金)の期間、1階展示室で人間文化研究機構連携展示「チベット ポン教の神がみ」を開催しております。

【本展示の内容】

本展示では、平成21年4月23日(木)～7月21日(火)に大阪の国立民族学博物館で開催した「チベット ポン教の神がみ」展を巡回展として当館で開催します。ボン教が築き上げてきた宗教的宇宙の構造の一部を図像資料によって紹介するとともに、ボン教の歴史や現代における分布、儀礼なども紹介します。

【ボン教とは】

ボン（Bon）教は中国のチベット自治区全域、四川省、甘粛省、青海省、雲南省からヒマラヤ南麓にまで広く分布している宗教で、仏教がチベットにもたらされ、政権と結びつく前まではその地域の主流を占めていました。土着的要素と密接な関連を保ちながら、独自の高度な数理体系を築きあげ、少数派ながらも宗教的集団として生きつづけています。

【本展示の構成】

- 1 ポン教の祖師シェンラブ・ミボ
- 2 基本的儀礼とその神がみ
- 3 悪趣清浄マンダラとその神がみ
- 4 歴史上の人物
- 5 密教の神がみ
- 6 神像と儀礼用具

【開催情報】

主 催：人間文化研究機構、国文学研究資料館、
国立民族学博物館

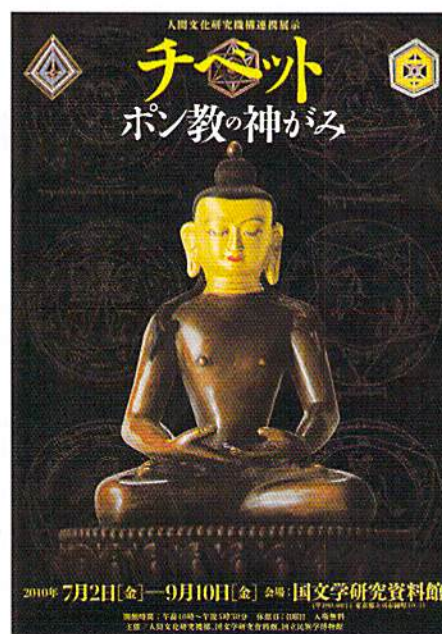
開催期間：平成22年7月2日(金)～9月10日(金)

休 館 日：日曜

場 所：国文学研究資料館1階展示室

開室時間：午前10時～午後4時30分

料 金：無料



連続講演「江戸文化再考」

平成 22 年度の連続講演は、九州大学名誉教授・中野三敏先生を講師にお迎えし、「江戸文化再考」という題で行います。開催日と内容は以下の通りです。

- 第 1 回 9 月 10 日(金) 大勢五転 -近代人の江戸観について-
- 第 2 回 9 月 17 日(金) 雅と俗と -江戸文化理解の根本理念-
- 第 3 回 9 月 24 日(金) 江戸モデル封建制 -その大なる誤解-
- 第 4 回 10 月 22 日(金) 近世的自我 -思想史再考-
- 第 5 回 10 月 29 日(金) 和本リテラシーの回復 -その必要性-



各回とも時間は午後 2 時 30 分～午後 4 時、場所は国文学研究資料館（立川市緑町 10-3）2 階大会議室です。

サテライト講座の参加募集

平成 22 年度サテライト講座を以下のとおり開催します。聴講を希望される方は、9 月 30 日(木)までに往復はがきに住所・氏名を御記入の上、

〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3 国文学研究資料館「サテライト講座」係へお申し込みください。

応募者多数の場合は抽選を行います。なお、聴講料は無料です。

ご応募お待ちしております。

日 時：平成 22 年 11 月 6 日(土)場所：東京堂神保町第 1 ビル

テーマ：「和歌文学への招待」

講 師：寺島恒世（国文学研究資料館教授）

海野圭介（国文学研究資料館准教授）

第 34 回国際日本文学研究集会

第 34 回国際日本文学研究集会「書物としての可能性-日本文学がカタチになるまで-」を平成 22 年 11 月 27 日(土)～28 日(日)の 2 日間にわたり、当館大会議室で開催します。

今年度は、これまでの研究発表、ポスターセッションに加え、萌芽的な研究発表の場としてのショートセッションを予定し、日程の最後に講演が行われる予定です。詳細な日程については、当館 Web ページ (<http://www.nijl.ac.jp/>) をご覧ください。ご参加をお待ちしております



総研大日本文学研究専攻博士後期課程 入試説明会のご案内

平成 22 年度 10 月 16 日(土) 13 時から当専攻の入試説明会を行います。

入試説明会では、専攻や入学試験についての説明の他、院生が利用する施設や、普段入れない書庫の見学、特別講義の聴講等ができます。

事前申込みは不要ですので、興味がある方は、是非ご来館ください。

■入試説明会プログラム

- 13:00 ~ 13:15 専攻についての説明
- 13:15 ~ 13:30 入試についての説明
- 13:30 ~ 13:50 総研大施設案内
- 14:00 ~ 14:20 図書館案内
- 14:20 ~ 14:50 現役院生との懇談
- 15:00 ~ 16:30 特別講義聴講
- 16:30 ~ 17:00 総合研究大学院大学担当教員研究室訪問

■平成 23 年度入学者募集

- [概要] 課程: 大学院博士後期課程
 学位: 博士 (文学)
 募集人数: 3 名
 研究体制: 複数教員による教育・研究指導
 (主任指導教員 1 名・副指導教員 2 名)

[願書受付期間] 2010 年 12 月 3 日(金) ~ 12 月 9 日(木)

[選考方法] ・修士論文の審査

・面接: 2011 年 2 月 2 日(水) ~ 3 日(木) ※予定



表紙写真紹介

『津軽家文書』

平成 21 (2010) 年度に、「陸奥国弘前津軽家文書」の追加として購入したものである(文書記号: 2009H、全 26 冊)。

その内の半数以上が、弘前藩庁における文書管理帳簿で、当館既収蔵文書にもない新出文書で、「壺番題帳」「御役所壺番御筆筒題帳」「別櫃題帳」3 冊の表紙である(本誌 8 頁参照)。

これらの帳簿により、当時の弘前藩庁における文書管理の実態が明らかになるものと期待される。



津軽家文書

● 特別展示「鉄心斎文庫 短冊文華展」

国文学研究資料館では、平成22年10月4日(月)～11月12日(金)の期間に特別展示「鉄心斎文庫 短冊文華展」を開催します。

本展示は、鉄心斎文庫(神奈川県小田原市)が所属する、兼好法師をはじめ、約6千点の和歌、俳諧、狂歌短冊の中から精選して展示を行います。一体化した誌と書によって表現される美の世界を、心ゆくまで堪能してください。

開催期間：午前10時～午後4時30分

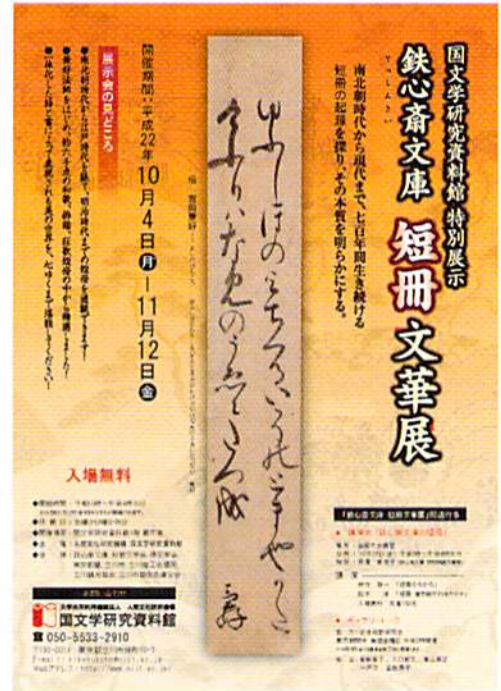
※10月4日(月)は午後1時30分からの開催となります。

休館日：土曜日・日曜日・祝日

開催場所：国文学研究資料館1階 展示室

主催：人間文化研究機構 国文学研究資料館

後援：鉄心斎文庫、和歌文学会、俳文学会、東京新聞、立川市、立川商工会議所、立川観光協会、立川市商店街連合会



関連行事

■講演会「鉄心斎文庫の短冊」

場所：当館大会議室

日時：10月15日(金)午後2時～午後4時30分

挨拶：芦澤 美佐子(鉄心斎文庫 伊勢物語文庫館)

講演：

神作 研一「短冊のちから」

鈴木 淳「短冊 書き継がれるカタチ」

入場無料 先着150名

■ギャラリートーク

協力：近世和歌研究会

展示期間中 毎週金曜日 午後2時開催

※10月15日(金)は講演会終了後に開催します。

担当：高梨素子、入口敦志、青山英正一戸渉、金田房子、中村健太郎

● 閲覧室カレンダー 2010年8月～10月

■青は休館日 ■黄色は土曜開館日

8月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

9月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

10月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24/31	25	26	27	28	29	30

開館 9:00～18:00 請求受付 9:30～12:00 13:00～17:00 複写受付 9:30～16:00
 ただし、土曜開館日は、開館 9:30～17:00、請求受付 9:30～12:00 13:00～16:00
 複写受付 9:30～15:00



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
 〒190-0014 東京都立川市緑町10-3
 Tel.050-5533-2910 Fax.042-526-8604

発行日 平成22年8月31日
 編集 国文学研究資料館広報出版室
 印刷所 三鈴印刷株式会社
 ©人間文化研究機構国文学研究資料館